

原著論文

「リベラル／サヨク」に関するオンライン・コミュニケーションのパターン——右派YouTubeコメント欄の分析

The Patterns of Online Communication on *Liberal/Sayoku*: An analysis of the comment sections of right-wing YouTube channels

キーワード：

ネット右派, オンライン・コミュニケーション, YouTube, 集団形成
keyword :

the internet right, online communication, YouTube, group formation

加 藤 大 樹

Hiroki KATO

要 約

本稿では、ネット右派がその主要な仮想敵である「リベラル／サヨク」に関してどのようなコミュニケーションをしているのかを明らかにするために、右派YouTubeチャンネルのコメント1,200件を解釈しながら分析・分類した。先行研究では、インターネット上における「リベラル／サヨク」批判の源流を探るために、日本におけるアンチ「リベラル／サヨク」的な思想の成り立ちについて研究してきた。その一方で、現在のネット右派現象は思想や理念に駆動されているというよりも、他者と接続することに動機づけられており、既存のアプローチだけでは不十分であるということも示唆されている。そこで本稿は、「リベラル／サヨク」批判の現場で生じているコミュニケーションのあり方に焦点を当て、そのパターンを帰納的に明らかにすることを試みた。

分析の結果、「リベラル／サヨク」への言及が多い右派YouTubeコメント欄では、敵手や自分たちに付与されるカテゴリについて議論する〔カテゴリの調整〕、敵手と自分たちの間の勢力争いについて論じる〔闘争の生成〕、右派への批判に対して主に反論を展開する〔批判の転覆〕という、大きく3つの方向性のコミュニケーションが生じていた。また、これらのコミュニケーションでは拡散的な意見交換と収束的な意見交換が発生しており、こうしたタイプの異なるやりとりが生起することでネット右派の

原稿受付：2025年2月10日

掲載決定：2025年6月19日

持続的な集団形成が可能になっているという示唆が得られた。

Abstract

This paper interpretively analyzes 1,200 comments on right-wing YouTube channels to understand how the internet right (*Net-Uha*) interacts with each other in relation to their primary enemy, *Liberal/Sayoku*. Previous studies have examined the formation of the anti-*Liberal/Sayoku* ideology in Japan in order to uncover the origins of online criticisms directed at *Liberal/Sayoku*. However, some scholars suggest that further research using alternative approaches is necessary, as the main motivation behind current right-wing activities online is not ideological but rather the desire for social connections. This research, therefore, focuses on the communication processes within *Liberal/Sayoku* criticisms, aiming to inductively identify its communication patterns.

The analysis reveals three main communication patterns in the YouTube comment sections where commenters frequently refer to *Liberal/Sayoku*: [adjusting categories], in which right-wing individuals discuss the categories assigned to themselves or their enemies; [developing conflicts], in which right-wing individuals raise issues regarding power dynamics between the right and the left; and [reversing claims], in which right-wing individuals predominantly counter criticisms directed at right-wing actors or values. Based on this analysis, it is also indicated that the communication processes involve two types of opinion exchange: one is scattered, and the other is convergent. The occurrence of both types enables the internet right to maintain their cohesion.

1 はじめに

2000年代以降、日本のインターネット上では、在日コリアンに対するヘイトスピーチやリベラルな言論人を嘲笑するコメントが数多く投稿されている。このように「ネット上で保守的・右翼的な言動を繰り広げる人々」(伊藤, 2019: 18)は「ネット右翼」「ネトウヨ」「ネット右派」(以下、本稿では「ネット右派」で統一)などと呼ばれ、今では社会的に広く知られた存在となっている。

こうしたネット右派の主要な仮想敵の一つが、「リベラル」「サヨク(左翼)」である。近年のSNSやニュースサイトのコメント欄には、一部のメディアや野党議員、活動家、知識人などを「リベラル」「サヨク」と呼び、憎悪や敵意をぶつける書き込みが数多く存在する。中には批判対象の政治的スタンスを厳密に検討することなく、ただ自分たちの気に食わない、「リベラル」「サヨク」のように見える個人や集団をそう呼んでいるケースも多い。このようにネット右派の投稿には、学術的な概念としてのリベラリズムや左翼思想というよりも、漠然とした仮想敵としての「リベラル／サヨク」への言及が頻繁に登場する。

これまでの右派研究では、「在日コリアン」を仮想敵とする活動がしばしば研究対象とされてきたが(例えば樋口, 2014; 高, 2015; 2017; 安田, 2012など),「リベラル／サヨク」もまた、近年の右派にとって重要な仮想敵の一つと考えられる。例えば現在のネット右派言説は、リベラル市民主義から疎外されてきた人々を代表しようとする活動や相互交流の中から生まれてきたという経緯がある(伊藤, 2019)。また近年の右派活動家の中には、確固とした右翼的・保守的な思想を持つことなく、「リベラル／サヨク」への反発から右派に接近している人が一定数存在している(小熊・上野, 2003; 鈴木, 2019)。つまり近年の右派は、「リベラル／サヨク」との関係の中で活動を展開してきた側面が大いにある。

本稿では、このようにネット右派にとって重要な仮想敵の一つである「リベラル／サヨク」に焦点を当て、YouTubeコメント欄で生じている「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションのあり方を分析する。以下、第2章で先行研究のレビューを行い、研究対象となる「リベラル／サヨク」批判の特徴と、コミュニケーションそのものに着目するという本稿のアプローチについて説明する。第3章でデータの収集と分析方法について確認した上で、第4章では「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションのパターンを記述し、第5章ではそれが集団としてのまとまりを生み出すメカニズムについて考察する。

2 先行研究

2.1 反「リベラル／サヨク」的な思想の成立

これまでの研究は、右派の論壇や運動における「リベラル／サヨク」に関する語りを読み解くことで、現在の「リベラル／サヨク」批判の背後にある思想を明らかにし、そうした語りがどのような歴史社会的背景のもとで人々に受容されてきたのかを明らかにしてきた。

まず、「リベラル／サヨク」批判の根底には、リベラリズムや左翼思想の一部に見られる原理主義や啓蒙主義、現実と乖離した空疎なユートピア論に対する嫌悪感がある(伊藤, 2019; 小熊・上野, 2003)。インターネットが普及する以前から、右派の論壇や運動の現場では、「進歩的知識人」が現実を見ずに上から目線の理想論を語っているという批判が行われていた(伊藤, 2019)。こうした右派の言説では、批判対象である「リベラル／サヨク」を「エリート」、自分たちを「庶民」の位置に置き、庶民によるエリート批判という構図で言論が展開してきた(伊藤, 2019; 小熊・上野, 2003)。

このような反「リベラル／サヨク」言説は1990年前後から顕在化するようになったが、そ

の背景には日本の政治構造の変動と、それによるリベラリズムや左翼思想の社会的な位置づけの変化がある。もともと、戦後の冷戦構造において反権力側の受け皿になっていた左派の思想は、冷戦体制の終結に伴う政治秩序の再編と、欧米に端を発するリベラル市民主義的な運動の盛り上がりを受け、一部の人々の間ではむしろ権威の側に位置する思想として認識されるようになる。特に、当時のリベラル市民主義ブームで置き去りにされた人々の間では、リベラル市民主義の権威性や欺瞞に対する不満が広がっていた。そうした政治や社会の流れの中で、右派の論壇や活動家を中心に、反「リベラル／サヨク」と反権威主義が結びつき、疎外された人々の視点に立った「リベラル／サヨク」批判が浸透していった（伊藤、2019；百木、2021；小熊・上野、2003）。こうして成立した反「リベラル／サヨク」的な思想が、現在インターネット上で生じている「リベラル／サヨク」批判の源流にあると考えられる⁽¹⁾。

2.2 ネット右派の結合原理・行動原理

「リベラル／サヨク」批判の根底にはそうした思想を読み取れる一方で、現在のネット右派現象の特徴に目を向けると、思想に焦点を当てたアプローチには限界もあるように思える。たしかに、従来の論壇や運動といった「語り」の領域（伊藤、2019）では、ある程度体系的な思想を共有した共同体の中で、一定の理念のもと活動が展開されてきた。しかし、現在のネット右派には、思想を核とした結びつきや、行動の指針となる共通の理念を見出すことができない（伊藤、2019；北田、2005；鈴木、2005）。つまり、現在インターネットの領域で生じている現象には、「語り」の領域とは別の結合原理・行動原理があるということが指摘されてきたのである。

まずネット右派の結びつきは、思想を共有することで成立しているというよりも、「接続」し続けることで維持されていると考えられる（北田、

2005；鈴木、2005）。ここでいう「接続」とは、他者とつながること、その場の空気を乱さずに他者とのやりとりを達成・継続することを指している。つまり、ネット右派の間では、他者とつながること自体を目的とした自己目的的な関係形成が前景化していると考えられる。そこでは、左派の思想において疎外されてきた人々を救済するために「リベラル／サヨク」を批判するというよりも、画面の向こうにいる他者とのやりとりを首尾よく繋いでいくための素材（ネタ）の一つとして「リベラル／サヨク」が批判される傾向にある⁽²⁾。

またそれと関連して、ネット右派の行動の基盤にあるのは、実現すべき理念というよりも、その場の「ノリ」や「空気」であると考えられる（北田、2005）。ネット右派は、共通の理念を内面化し、それに基づいて行動しているわけではない。やりとりを円滑に接続していくために、やりとりをする中で生まれるその場のコンテキスト（早川・井出、2009）が重視される傾向にある。「リベラル／サヨク」批判では、特定の理念の実現に向けてやりとりが方向づけられているというよりも、その状況に固有のコンテキストによってやりとりの方向性が規定されている側面が大きいのである。

このような、思想を志向する集合体から接続すること自体を志向する集合体へ、実現すべき理念を基盤とした活動からその場のミクロなコンテキストを基盤とした活動へという、右派の集合現象の性質の変化は、次のことを示唆している。第一に、ネット右派の活動を説明するには、その背後にある思想や理念（語り）を理解するだけでは不十分である。第二に、集団統合の核となる思想や理念を見出せず、明確なメンバーシップもないネット右派において、持続的な集団形成は自明な前提ではなく、それ自体が問い合わせの対象となる。

2.3 語りの分析からコミュニケーションの分析へ

そこで本稿は、「リベラル／サヨク」批判の背後にある思想や理念（語り）ではなく、その現場

で生じているやりとりそれ自体のあり様に焦点を当て、インターネット上で生じているコミュニケーションのパターンを帰納的に明らかにすることを試みる。既述のように、現在のインターネット上の「リベラル／サヨク」批判の動機となっているのは、共通の思想や理念というよりも他者と接続（やりとり）することである。したがって、まずは「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションのパターンを明らかにすることで、人々を結びつけるやりとりの全体像を明らかにすることが重要だと思われる（第4章）。

また、「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションのあり方を分析するというアプローチは、ネット右派の持続的な集団形成がいかにして可能かという問い合わせを解明する上でも、有効なアプローチであると考えられる。

既述のように、ネット右派は接続することで結びついているものの、それだけではまとまりのある集団は形成されない。こうした中で、ネット右派に集団としてのまとまりを生み出している要素の一つが、「リベラル／サヨク」に代表される「共通の敵」の存在である（倉橋, 2018; 小熊・上野, 2003）。つまり、内部に集団統合の核がないネット右派にとって、「リベラル／サヨク」という外部との対立が、集団としてまとまる契機になっているということである。

ただし、既存の研究では、対立に基づく集団形成についての示唆はあるものの、共通の敵に関するどのようなコミュニケーション過程が持続的な集団形成を可能にするのかについては具体的に検討されていない。それに対して本稿では、「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションのあり方を明らかにすることで、「リベラル／サヨク」というシンボリックな仮想敵はどのようなやりとりを通じて人々の意識に上っているのか、そしてこうしたコミュニケーションが持続的な集団形成に対してどう作用しているのかについて考えたい（第5章）。

3 方法

3.1 調査対象と収集したデータ

本稿で調査対象としたのは、YouTubeのKAZUYA Channel（以下、KAZUYA Ch.）とディイリーWiLL（以下、WiLL）である。

YouTubeを調査フィールドとした理由は二つある。第一に、YouTubeやニコニコ動画のような動画共有サイトは、右派運動団体なども積極的に利用しており、右派の重要な情報流通経路の一つと考えられるからである（Hall 2021；樋口, 2014；鈴木, 2019）。第二に、1本の動画（話題）に対してスレッド形式でコメントが連なっているYouTubeのアーキテクチャが、本稿の分析に適していると考えられるからである。一口に「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションといっても、やりとりの焦点となる具体的な話題は多岐に渡る。そして話題の種類が変われば、それに関するやりとりのあり様も変化しうる。したがって、インターネット上の書き込みを帰納的に分類するには、その焦点となっている話題ごとにやりとりを切り分けて分析する必要がある。その点、あらかじめ話題ごとにやりとりが区切られているYouTubeコメント欄は、Xなどと比べてデータの収集・分析をしやすいプラットフォームといえる。

調査対象としたチャンネルについても簡単に説明しておこう。KAZUYA Ch.は、ネット右派のオピニオン・リーダーの一人であるKAZUYAが2012年から運営しているチャンネルであり、本稿執筆時点での登録者数は65万以上に上る。一方WiLLは、保守系の政治オピニオン誌である『月刊WiLL』が2019年に開設したチャンネルであり、登録者数は54万を超えている。

KAZUYA Ch.とWiLLを調査対象とした理由は二つある。一つは、登録者の多さから両チャンネルがネット右派の間で一定の影響力を持っていると考えられるからである。もう一つは、両チャン

ネルともその時々の時事問題の解説動画をメインに投稿しており、様々な話題に関するやりとりを収集できるからである。やりとりのパターンを帰納的に明らかにする上で、多様な話題のデータを収集・分析できることは大きな利点といえる。

両チャンネルに関して収集したデータは、調査時点で取得可能だった全動画の動画データとコメントデータである。動画データとは、動画ID、タイトル、投稿日時、再生数、コメント数、like数を、コメントデータとは、動画についているコメントのコメントID、コメントタイプ（親／子）⁽³⁾、本文、投稿日時、like数、返信数、コメント投稿者IDのことを指す。2023年1月に、2022年末までに投稿された全動画・全コメント（データ収集時点で削除・非公開になっている動画は除く）のデータをYouTube APIで収集した結果、KAZUYA Ch.では合計で1,378本の動画、1,055,222件のコメントのデータが、WiLLでは1,099本の動画、424,473件のコメントのデータが集まった。

3.2 分析の手順

上記で収集した動画・コメントには、「リベラル／サヨク」に関係ない話題のものも多く含まれている。そこで本稿で分析対象となるやりとりを抽出するために、まずは両チャンネルの全動画の中から、コメント欄で「リベラル／サヨク」関連語の使用が活性化している動画を選定した。そして選定した動画に投稿されているコメントのうち、多くのlikeがついているコメントを分析対象として抽出した。以下、順に説明する。

まず、「リベラル／サヨク」関連語の使用が活性化している動画を特定するために、収集した全コメントのうち、「リベラル／サヨク」関連語を一つ以上含むコメントには1のラベルを、「リベラル／サヨク」関連語を全く含まないコメントには0のラベルを機械的に付与していった。なお、ここでいう「リベラル／サヨク」関連語とは、ネット

右派が「リベラル／サヨク」を指し示すときに使用する単語群のことであり、本稿では「リベラル」、「左翼」、「左派」、「左」、「パヨク」、「左巻き」を「リベラル／サヨク」関連語とした。その後、動画ごとに「リベラル／サヨク」関連のコメントの割合を算出し、各チャンネルで「リベラル／サヨク」関連のコメントの出現率が高い動画上位20本を選定した（表1）。

そして、こうして選定した各動画のコメントのうち、多くのlikeが付与されているコメント上位30件（「リベラル／サヨク」関連語を一つ以上含むコメントのうちlike数上位15件、並びに、「リベラル／サヨク」関連語を全く含まないコメントのうちlike数上位15件）を分析対象として抽出した。つまり、全40本の動画で計1,200件のコメントが分析対象となっている。

最後に、このように抽出したコメントをオープンコーディング⁽⁴⁾することで、抽象的な分析カテゴリ（やりとりのパターン）へと帰納的にまとめていった。オープンコーディングの手順としては、まずは動画の内容を確認し、コメント欄におけるやりとりがどのような話題を焦点として生じているのかを確認した⁽⁵⁾。次に、動画ごとに分析対象となるコメント一つひとつを解釈し、各コメントを一言でまとめたラベルを作成する。そして作成したラベルをコメント間・動画間・チャンネル間で比較することで、より抽象的な分析カテゴリにまとめていった。以上、データの収集から分析に至るまで、全ての工程を筆者1人で実施した。

なお、以下の分析結果のパートでは、読みやすさを考えて、最終的に導出した最上位のカテゴリからサブカテゴリへと具体化していく形で分析カテゴリの説明を行う。その際、分析によって作成した分析カテゴリ名は〔 〕で括って表示する。また、具体的なデータ（コメント）を引用する場合には引用文を〈 〉で括り、引用文が投稿されていた動画の番号を（ ）内に記載する。コメント原文の改行箇所には／記号を付与する。

表1 コメント欄で「リベラル／サヨク」関連語の出現頻度が高い動画上位20本

#	KAZUYA Ch.	#	WILL
K1	SNSで保守派に完敗するリベラル派★【サンディブレイク235】	W1	【茂木誠×朝香豊】リベラルの正体を暴く！【WiLL増刊号】
K2	YouTubeを制覇した保守派と既存メディアにあぐらをかいて衰退する左派	W2	【卑劣！】リベラル団体が書店に圧力＝言論封殺【WiLL増刊号】
K3	ネトウヨとパヨク	W3	【竹内久美子・特別編】リベラルは浮気症！？ 遺伝子との関係を深堀り【WiLL増刊号 #251】
K4	石原慎太郎さんの訃報に対する左派の反応に絶句…	W4	【立憲民主】菅直人「リベラルなめんなよ】【WiLL増刊号】
K5	いわゆる「ネトウヨ」とは一体何なのか？【ゲスト：倉山満氏】	W5	【阿比留瑞比】安倍・特朗普はバカ発見器【WiLL増刊号 #394】
K6	イーロン・マスクのTwitter改革で駆逐される左派メディア	W6	【大澤昇平】「中国人は採用しない」の何が悪い！東大教授・学生の本音は「左翼嫌い」？【WiLL増刊号】
K7	衆院選への課題はネトウヨに勝つ仕組み？ちょっと何言ってるのかわからないですね	W7	【門田隆将】世界を席巻する左翼“変異株”的正体【WiLL増刊号 #496】
K8	なぜ「保守は団結」出来ないのか？【参政党、新党くにもり、幸福実現党、日本第一党…】	W8	【偏見御免！】左翼教授あるある言います【WiLL増刊号 #293】
K9	竹田恒泰氏、妨害により講演会中止に…そして常軌を逸したTwitter民と法廷闘争へ	W9	【小川榮太郎】なぜいま保守主義が必要なのか【WiLL増刊号 #472】
K10	ネトウヨ認定・ニコニコ動画の没落等、深田萌絵さんとの対談	W10	【安倍ロス】サヨクの断末魔【WiLL増刊号 #267】
K11	沖縄タイムス記者「政府そのものがネトウヨ」←は？	W11	【岩田温】暴露！保守が迫害されるアカデミズム【WiLL増刊号】
K12	「元ネトウヨでした」って流行らせようとしている？【サンディブレイク107】	W12	【岩田温】百田尚樹『日本国紀』批判で露呈した学者の傲慢【WiLL増刊号】
K13	左派から目の敵にされる杉田水脈総務政務官が過去の発言を謝罪 しかし国会でやる必要あるのか？	W13	【左翼の論理】プーチン＝安倍、ロシア＝日本だそうです【WiLL増刊号】
K14	百田尚樹著『日本国紀』のサイン本を告知した書店の不買運動を行うも宣伝になってしまふ弁護士	W14	【門田隆将】「上級国民を血祭りに」でいいか？【WiLL増刊号 #497】
K15	謎のメディア「Choose Life Project」、立憲民主党から資金が流れていたとして津田大介氏、望月衣塑子氏ら出演者5名が抗議文を発表www	W15	【お花畠】防衛費GDP2%で「軍国化」という左翼妄想【WiLL増刊号】
K16	マスコミは高市早苗氏を「右翼の女」にしたい	W16	【極左映画】朝日新聞「捏造記者」を擁護する同業者【WiLL増刊号】
K17	日の丸が並ぶ光景は気持ち悪いですか？	W17	【岩田温】秋篠宮に近づく極左の影【WiLL増刊号】
K18	【ひろゆきvs基地反対派】場外乱闘で暴れるフェミニストを正論で一刀両断する室井佑月氏	W18	【日本学術会議】左翼教授を任命拒否して何が悪い！【WiLL増刊号 #289】
K19	安倍元総理を銃撃した山上容疑者に乗せられまくりな左派とマスコミ	W19	【山田晃 元DHCテレビ社長】大炎上！「ニュース女子」裁判の顛末【デイリーWiLL】
K20	杉田水脈氏寄稿文で炎上の新潮45が最新号で再炎上【LGBT】	W20	【茂木誠&朝香豊】安倍「後」の自民リベラル化を止められるか【WiLL増刊号】

4 分析結果

分析対象の動画コメント欄では、[カテゴリの調整]、[闘争の生成]、[批判の転覆]という、大きく3タイプのやりとりが頻出していた⁽⁶⁾。以下、順に説明する。

4.1 カテゴリの調整

[カテゴリの調整]とは、敵手もしくは自分たちに付与されるカテゴリの定義を確認したり、新たにカテゴリを適用し直したりする一連のやりとりのことを指す。[カテゴリの調整]に該当するコメントは、動画K3、K5、K7、K10、K11、K16、W1、W3、W4、W5、W8、W16、W19で多く投稿されていた。この[カテゴリの調整]は、[カテゴリの定義]と[再カテゴリ化]という、大きく二つのサブカテゴリを含んでいる。

4.1.1 カテゴリの定義

[カテゴリの定義]は、敵手もしくは自分たちに付与されるカテゴリをとりあげ、そのカテゴリに含まれる人々の特徴について言及し合うようなやりとりを指す。こうしたやりとりは、特に「リベラル」や「パヨク」といった敵手のカテゴリに関して生じていた。例えば、〈リベラルはヒッピーだ。理想郷を夢見て出来もしない話をして理想論ばかりを主張して現実では何も成し遂げられない。〉(W5) や〈パヨクさんはまず相手の人格否定から入るよね〉(K3)といったコメントが例として挙げられる。

上記のように直接的にカテゴリの特徴を記述するのに加え、過去の出来事や自身の経験を追加することで、記述内容の妥当性を高めるようなやりとりも生じていた。例えば「リベラルは浮気性」という話題を扱った動画では、〈パヨって市民の会とかでも不倫の巣窟らしいよ。それ目当てで参加する人たちもいるって聞く。これは実際にパヨ市民の会に参加していた人の手記が元ネタ。〉

(W3) のように、「リベラル／サヨク」は性にだらしないという定義を正当化するようなやりとりが生じていた。

なお、[カテゴリの定義]では、「リベラル／サヨク」の特徴として政治的主張に関するものから人格的なものまで様々な意見が行き交っており、お互いにやりとりをすることで何か統一的なイメージを構築しようといった試みはほとんど生じていなかった。そこでは「リベラル」「左翼」「パヨク」といったカテゴリに関して、各々が考えるイメージを思いのままに投げかけるようなコミュニケーションが生じていた。

4.1.2 再カテゴリ化

[再カテゴリ化]は、敵手や自分たちに適用されるカテゴリの妥当性を疑問視し、自分たちなりにカテゴリを適用し直すようなコミュニケーションのことを指す。特に、敵手に対する「リベラル」というカテゴリの適用、自分たちに対する「右翼」「ネトウヨ」というカテゴリの適用に関して、[再カテゴリ化]が生じる傾向にあった。[再カテゴリ化]はさらに、[カテゴリ適用の問題化]、[新たなカテゴリの適用]、[既存のカテゴリの再適用]というサブカテゴリを含んでいる。

[カテゴリ適用の問題化]とは、敵手や自分たちに付与されたカテゴリに妥当性や正当性がないことを確認し合うようなやりとりのことを指す。例えばWiLLの動画出演者が敵手をリベラルと呼んだ際には、コメント欄で〈リベラルって呼び方が間違ってると思う。単なる独善主義です〉(W5)といったやりとりが生じていた。また「ネトウヨ」という呼び名を議題にした動画では、〈憲法改正した方が良いと意見するだけでネトウヨって言われるもんな。〉(K5)のように、自分たちに「ネトウヨ」というカテゴリが適用されることを問題視するようなやりとりが生じていた。

さらに[カテゴリ適用の問題化]では、そうしたカテゴリを適用するのは敵手であり、敵手に都

合のいいようにカテゴリが操作されていると指摘するようなやりとりも頻繁に生じていた。例えば、〈パヨクにとっては反対意見は全員ネットウヨになります〉(K5), 〈「ネットウヨ」って言葉はパヨクが議論から逃げる時の常套句。ただそれだけ。〉(K5) のように、敵手が恣意的に「ネットウヨ」というカテゴリを適用しているだけだという意見が交換されていた。

次に【新たなカテゴリの適用】とは、問題のある既存のカテゴリとは別に、新たなカテゴリを自分たちなりに適用し直すようなやりとりのことを指す。そこで新たに適用されるカテゴリには、政治的なものと非政治的なものがある。

政治的カテゴリを適用し直す場合には、既存の政治的イデオロギーの軸に敵手や自分たちを「正しく」位置づけ直すということが行われる。例えば、〈日本でいう保守は海外では中道か、ちょっと左なんですよね〉(K2) や〈日本ではリベラル=極左のあたおか〉(K1) といったコメントはその典型例である。このように、自分たちを「中道」や「真のリベラル」、敵手を「極左」などと位置づけ直すことで、新しい政治的カテゴリを適用するようなやりとりが生じていた。

一方、非政治的カテゴリを適用する場合には、右左という既存の政治イデオロギーの枠組みとは異なる新たなカテゴリのペアが作り出される。例えば、「愛国者」対「反日（外国人）」や「普通の人」対「活動家」といったカテゴリのペアを持ち出し、それを自分たちや敵手に適用するということが行われる。〈右過ぎるのもでも左過ぎるのもよくないだろうな。／一番大切なのは愛国心だと思うわ。／日本の事をどれだけ大切に考えれるかが大切かと〉(K3) や、〈愛国心あるパヨクを見たことがないんだよなあ〉(K3) といったやりとりが例として挙げられる。この例では、「愛国心」という指標を、右や左といった政治的イデオロギーとは異なる分類軸として持ち出し、それをもとに自分たちや敵手を位置づけるということが行

われていた。

最後に【既存のカテゴリの再適用】とは、自分たちが「右翼」や「ネットウヨ」と呼ばれることに違和感を覚えつつも、それに積極的な意味を付与することで、そのカテゴリをあえて受け入れるようなコミュニケーションのことを指す。これは言い換えると、既存のカテゴリの適用権を敵手から奪い返し、自分たちで改めて適用し直すやりとりと言えるだろう。例えば、〈私はよく言われます、『右』と。あんな連中に嫌われるから私は右なんだと実感する。あんな連中と同じにならないなら私は右でいい。〉(K10) や、〈日本が好きでネットウヨと言われるのなら俺らはそれを誇りとして考えよう〉(K10) といったやりとりが例として挙げられる。

4.2 騛争の生成

【闘争の生成】とは、敵手と自分たちの間で勢力争いが生じているという認識を共有し、そうした勢力争いへの向き合い方を確認し合うような一連のやりとりのことを指す。【闘争の生成】に該当するコメントは、K1, K2, K6, K8, K12, W6, W7, W9, W14, W17, W20で多く投稿されていた。この【闘争の生成】は、【パワーバランスの把握】、【パワーバランスの解釈】、【重要アクターの設定】という三つのサブカテゴリを含んでいる。

4.2.1 パワーバランスの把握

【パワーバランスの把握】とは、（特定の領域において）敵手と自分たちのどちらがより大きな影響力を保持しているかを確認し合うようなやりとりのことを指す。そこでは特に、大学などの領域における「リベラル／サヨク」の優位性を見出し、敵手が社会に対してより大きな影響力を及ぼしていると確認し合うようなやりとりが頻繁に生じていた。例えば、〈リベラルにあらずんば学者にならぬ、〉というのが学者の世界では一般的だそうで

すね…現実見て生きてる人が異端扱いされるのはひどい話です。〉(W8), 〈保守を公言した学生たち」が左翼学生と教授、講師の組織によって潰されることもあります。〉(W8) といったコメントが例として挙げられる。

一方、時には自分たちの方が勢力争いで優位に立っていると確認し合うようなやりとりも生じていた。特に〈SNSは保守派が強いですよね。もちろん、リベラル派がSNS上で目立ってないというワケではないんですけど。〉(K1) のように、ネットメディアの領域では右派が優勢であるという見方が共有される傾向にあった。

4.2.2 パワーバランスの解釈

次に〔パワーバランスの解釈〕とは、前述のように敵手との間に不均衡な力関係が存在するという認識に立った上で、そうした状態の原因や望ましさを解釈し合うようなコミュニケーションのことを指す。〔パワーバランスの解釈〕はさらに〔脅威イメージの付与〕と〔正当性の付与〕というサブカテゴリを含んでおり、敵手が優位な状態に対しては〔脅威イメージの付与〕が、逆に自分たちが優位な状態に対しては〔正当性の付与〕が生じる。

まず、敵手の方が優位だという認識がある場合には、そうした敵手優位の状況を社会にとっての脅威とみなす〔脅威イメージの付与〕が生じる。例えば、〈左派は…（中略）…議論すらもタブー視する風潮を作り法律を作つて更に規制を強化しようとするからなあ。とにかく規制に規制を重ね国をどんどんダメにしていくそれが彼らの目的。〉(W7) や〈聴けば聴くほどアカデミズムの世界というのは戦後日本の宿痾の一つですね。日本学術会議の件で登場した先生を見ていると、あの連中が毀損しているだろう日本の国益の大きさに目眩がします。〉(W11) といったコメントが例として挙げられる。このように、敵手の活動によって社会が崩壊しかねないという主張を繰り広げることで、相互に危機感を煽るようなコミュニケ

ションが行われていた。

一方、自分たちが優位だという認識がある場合には、そうした自分たち優位の社会状況を正常で望ましいとみなす〔正当性の付与〕が生じていた。例えば、ネット上ではリベラルよりも保守の方が優位であるという話題に関して、〈テレビが強かつた時代は左派の発言力が強かった印象だけどネットの情報が早く流れる現代になって……左派の発言が間違ってるって認識された結果だと思います〉(K2) や〈リベラル系が訴求力が弱いのは言つてることがおかしいからに過ぎない。納得できなきこと言ってたら訴求力がないのは当たり前のこと。〉(K1) といったコメントが投稿されていた。このように、敵手を貶することで自分たちが優位であることに正当性を付与するようなやりとりが行われていた。

4.2.3 重要アクターの設定

最後に〔重要アクターの設定〕とは、敵手との闘争の鍵を握る重要なアクターを特定し、そのアクターへの批判／支持を表明するようなやりとりのことを指す。例えば、皇室において敵手の影響力が増しつつあるという動画に関して、〈宮内庁は何やっているのか存在意義無し？改めるべき〉(W17) や〈宮内庁にはほんましっかりしてほしいですわ！皇室の方々の周りにそんな左翼のクズを近づけんといつほしいです！〉(W17) といったコメントが投稿されていたが、これらは宮内庁を重要アクターとした上で、そこに苦言を呈するやりとりと言える。逆に、自民党がリベラル化しつつあるという動画の〈自民党がリベラルになつてしまったら、どこに投票したら良いのだろうか？高市さんや小野田さんに頑張って頂きたいです。〉(W20) というコメントは、特定の政治家を重要アクターとした上で、そこへの支持を表明するコメントの一例である。こうしたコメントを相互に表明し合うことで、敵手との闘争における重要アクターを特定し、その評価を共有している

と考えられる。

4.3 批判の転覆

【批判の転覆】とは、主に右派の人物・価値観に対する批判が社会（の一部）で発生した際に、その批判内容を検討し、基本的には批判に対する反論を展開する一連のやりとりのことを指す。【批判の転覆】に該当するコメントは、K4, K9, K13, K14, K15, K17, K18, K19, K20, W2, W10, W12, W13, W15, W18で多く投稿されていた。【批判の転覆】は、【批判内容の評価】、【批判行為の読み替え】、【結晶化】、【紛争化】という四つのサブカテゴリを含んでいる。

4.3.1 批判内容の評価

まず【批判内容の評価】とは、主に右派の人物や価値観に対する批判を取り上げて、その批判の内容が妥当かどうかを評価するようなコミュニケーションのことを指す。こうしたやりとりにおいて、批判に同調するコメントは少なく、ほとんどのケースでは批判に対する反論が噴出していた。例えば百田尚樹の『日本国紀』の歴史記述が批判された際には、〈色々な歴史観がある事は否定しないが、少なくとも国で教える歴史は、生まれた国に対する誇りや忠誠心が持てる歴史観であるべきだと思います。当たり前の話ですよ！〉(W12) のように、『日本国紀』に問題はないという反論が投稿されていた。また、〈左派が反応してる本は良い本w〉(W2)、〈左翼が騒ぐってことは正解〉(W18) のように、批判者を「リベラル／サヨク」だと推測し、その逆張りが正しいという論法で批判対象を擁護するようなやりとりも生じていた。

なお、唯一の例外として、動画K19では右派への批判に賛同するコメントが多くのlikeを集めていた。この動画は、安倍元首相が射殺された後の「リベラル／サヨク」(マスメディア)による旧統一教会問題批判を取り上げ、それに動画投稿主

であるKAZUYAが苦言を呈す内容になっている。KAZUYAは動画内で、安倍元首相や自民党が旧統一教会と関係を持っていたことは問題だが、「リベラル／サヨク」が殺人犯の恩恵通りに安倍元首相を批判しているのも問題があるとして、「リベラル／サヨク」による自民・安倍批判に反論していた。しかしそれに対してコメント欄では、〈正直、左派やマスコミの肩は持ちたくないが、旧統一教会については今のうちに関係を断ち切つてもらうためにもっと追求してもらいたい〉(K19)、〈この件に関しちゃ、左派とかマスゴミ関係なくないですか？韓国が大嫌いだから自民党に投票してた人間もいるわけで…。国民一丸になって旧統一教会との関係を断ち切るように追求するべきだと思います。〉(K19) のように、批判に賛同するべきだというやりとりが生じていた。

4.3.2 批判行為の読み替え

上述の【批判内容の評価】では（例外のK19を除いて）右派への批判に対する反論が盛り上がっていたが、そうした反論と密接にかかわっているのが【批判行為の読み替え】である。この【批判行為の読み替え】とは、そもそも右派への批判が本当の意味の「批判」とは言えないとして、行為の意味を解釈し直すようなやりとりのことを指す。

典型的なのが、批判の背後には別の動機があり、批判は単なる「パフォーマンス」であると読み替えるようなコミュニケーションである。例えば、杉田水脈の「生産性」発言が多くの批判を浴びた際には、〈慰安婦問題に切り込んでいた杉田水脈氏、あちら方面の人たちから目の敵にされていますが応援してます〉(K13) というコメントのように、「批判は敵手にとって都合の悪い人物を排除するためのパフォーマンスである」という読み替えが行われていた。

また他にも、右派への批判を正当な批判の範疇を超えた「問題行動」として読み替えるようなやりとりも頻出していた。例えば、百田尚樹や櫻井

よしこなど保守系の本を並べる書店に対して市民団体が公開質問状を送ったという話題に関しては、〈書店に圧力をかけるとか、こいつらのやり方って違法行為じゃないんですか?〉(W2)のように、もはや異議申し立てではなく社会的に許されない言論封殺行為であるという読み替えが行われていた。

なお、[批判内容の評価]で批判への同調が多く投稿されていた動画K19の分析データでは、[批判行為の読み替え]は観察できなかった。

4.3.3 結晶化

動画K19を除き、[批判内容の評価]と[批判行為の読み替え]が首尾よく達成されたケースでは、さらに〔結晶化〕もしくは〔紛争化〕という二つの異なる方向性のやりとりが生じていた。

まず〔結晶化〕とは、右派への批判は敵手である「リベラル／サヨク」によって主導されているとした上で、その敵手のイメージを再確認するようなやりとりのことを指す。これは言い換えると、右派への批判という出来事をもとに、「リベラル／サヨク」のイメージを結晶化させるやりとも言える。例えば『日本国紀』が批判された際には、〈左界隈は多様性を認めろという割に、多様性を認めないっていうwだからなかなか支持されないんだよw〉(K14)のように、『日本国記』への批判=多様な意見の封じ込めであるとして、「リベラル／サヨク」は「ダブルスタンダード」であるというイメージが強化されていた。また、〈あの国の反日も病的だけど、日本に存在しているおサヨクさんもそう。似ているのはなぜ?〉(K14)のように、『日本国記』への批判=日本への嫌悪感の表明であるとして、「リベラル／サヨク」は「反日」であるというイメージも共有されていた。

このような〔結晶化〕と前述の〔カテゴリの定義〕は、敵手のイメージを記述するという点では似通っているが、その内容の統一性という点では大きく異なる。〔結晶化〕で敵手に付与されるイ

メージはより統一的であり、記述内容に共通のパターンのようなものが観察できた。特に頻繁に共に有されていたイメージとしては、都合よく態度が変化するという「ダブルスタンダード」イメージ、日本が嫌いもしくは外国勢力とつながっているという「反日・外国勢力」イメージ、自分たちには理解できない考え方や倫理観を持っているという「他者」イメージである。このように敵手のイメージにある程度の統一性があるという点が、バラバラな意見が飛び交う〔カテゴリの定義〕とは大きく異なっている。

4.3.4 紛争化

もう一つの〔紛争化〕とは、右派への批判に対する社会全体の反応に目を向け、批判者（敵手）の意見と反論者（自分たち）の意見のどちらがより社会の承認を得ているかを確認し合うようなコミュニケーションのことを指す。これは言い換えると、右派への批判という出来事を火種として、敵手との間で社会的承認を巡る紛争状態に入っていると言うことができるだろう。〔紛争化〕はさらに〔社会的な反応の評価〕と〔批判対象の応援〕という二つのサブカテゴリに分けることができる。

まず〔社会的な反応の評価〕とは、右派への批判に対して社会がどういった反応を示しているのか、そしてそれが妥当な反応なのかを確認し合うようなやりとりのことを指す。例えば、学術会議問題で政府批判が生じた際には、〈大半の日本国民は現政権を、支持しているのは現実です。反日反米パヨパヨの言う国民?の意見とか笑止千万、厚かましいわ。〉(W8)のように、自分たちの意見が社会的支持を得ていると確認し合うようなやりとりが生じていた。逆に、森元首相の女性発言が大きな問題となった際には、〈女性は話が長い…と聞いてクスッと笑ってた私。まさかこんなわーわーなるとは思わなかった…異様ですよね。〉(W7)のように、批判者への賛同が多いという状況を問題視するようなやりとりが生じていた。

次に「批判対象の応援」とは、批判されているアクターを応援する姿勢を相互に見せ合うことで、批判対象を擁護する社会的気運を生み出そうとするやりとりのことを指す。例えば、杉田水脈が批判されたことに対する〈杉田さん小さくまとまらないで今まで通り頑張って欲しい〉(K13)というコメントや、『日本国紀』を告知した書店が批判されたことに対する〈紀伊國屋さん、心配要らないよ、本を買う右翼チームがついてるぜ!!〉(K14)、〈よし、紀伊國屋書店に行こう〉(K14)といったコメントがその例として挙げられる。

5 考察

本章では、第4章の「リベラル／サヨク」に関するオンライン・コミュニケーションの分析をもとに、ネット右派の持続的な集団形成がいかにして可能になっているのかについて考察する。結論を先取りすると、「リベラル／サヨク」に関するオンライン・コミュニケーションには2つの局面があり、それぞれが集団としてのまとまり創出に異なる形で寄与していると考えられる。

まず第4章の分析から、「リベラル／サヨク」に関するやりとりでは、[カテゴリの調整]、[闘争の生成]、[批判の転覆]という、三つの全く異なる方向性のコミュニケーションが展開されていることがわかった。加えて、そこでの意見交換のあり方に注目すると、拡散的な意見交換と収束的な意見交換という、二つの異なるタイプの意見交換が生じていたと言える。

前者は多様な意見や考えに開かれたやりとりであり、参与者の各々が自分の思いや考えを自分勝手に投げかけるような意見交換のあり方である。それゆえ時には、相容れない意見が問題なく並存する状況も生じる。こうした意見交換のわかりやすい例として、[カテゴリの調整]におけるやりとりが挙げられる。例えば「カテゴリの調整」の「カテゴリの定義」では、「リベラル／サヨク」

の特徴に関するやりとりが生じるが、そこでは個々の参与者が抱く多様なイメージが行き交うのみであり、何か一貫したイメージが共有されていなかったわけではなかった。つまり、こうしたやりとりでは、集団として一つの考え方や意味に収束するというよりも、多様な意見が反響し合うような形でコミュニケーションが生じていたと言える。

一方後者は、参与者の意見が同じような考え方や認識枠組みに収斂していくようなやりとりであり、参与者間で認識の相違がある場合には、集団として同じ考えに到達するための議論やすり合わせが生じるような意見交換のあり方である。こうした意見交換のわかりやすい例として、[批判の転覆]におけるやりとりが挙げられる。例えば[批判の転覆]の「結晶化」では、既述のように「リベラル／サヨク」に関して同じようなイメージが繰り返し交換される傾向にあり、集団として一貫した認識枠組みが共有されていたと言える。また動画K19のように、集団としての見解から逸脱した意見が出てきた場合は、それに多くの批判が寄せられ、やりとりの参与者全体で意見を統一しようという動きが生じていた。つまり[批判の転覆]では、各々の多様な意見が行き交うというよりも、集団として統一的な意味に収斂していくようなコミュニケーションが生じていたと言える。

このように、「リベラル／サヨク」に関するオンライン・コミュニケーションには、拡散的な意見交換が生じる局面と、収束的な意見交換が生じる局面があり、それらは参与者の集団形成に対して異なる形で作用していると考えられる。

まず拡散的な意見交換は、多様な意見や考えに開かれているため、集団内の対立や葛藤が見過ごされやすい局面であり、それゆえ様々な立場を内包しながらつながりを維持する（コミュニケーションを継続させる）機能を果たしていると考えられる。既述のように、ネット右派は思想や理念の一致によって結合しているわけではなく、「接続」し続けることで結びついたゆるやかな集合体であ

る（北田，2005；鈴木，2005）。そのため、その内部には様々な価値観や立場の人を含みこんでいる（伊藤，2019）。こうした異種混交的な集団のつながりを安定的に維持していく上で、多様な意見や考えに開かれた拡散的な意見交換は重要な役割を果たしていると言えるだろう。このようなコミュニケーションは「統合的なメカニズムであるというよりも、むしろ寄せ集めのための装置」（Cohen, 1985=2005: 17）として機能していると考えられる。

もう一方の収束的な意見交換は、参与者間で同じ信念を共有していることを再確認するような局面であり、集団としての凝集力を高める機能を果たしていると考えられる。前述のように、多様な人々からなるネット右派は拡散的な意見交換を通じてつながりを維持しているが、その局面ではその開放性ゆえに、集団の一体感は生じにくい。こうした中で【批判の転覆】における収束的な意見交換は、一時的に集合的信念を活性化させることで、集団の形を再確認する契機（Durkheim, 1912 =2014；伊藤, 2011）となっていると考えられる。ただし、そこでは集団内の同質性が重視されるため、裏を返せば動画K19のように価値観や意見の違いが表面化する危険性もはらんでいる。したがって収束的な意見交換は、集団内の葛藤をあらわにするリスクも含みつつ、集団としてのまとまりを強化する機能を果たしていると考えられる。

このような「リベラル／サヨク」関連のコミュニケーションにおける2つの局面は、ネット右派のまとまりを創出する上で相補的な役割を果たしていると言える。拡散的な意見交換だけだと、つながりを安定的に維持できる一方で、集団の一体感は生じにくい。逆に収束的な意見交換だけだと、集団の一体感は生じる一方で、葛藤が表面化する契機にもなるため、つながりを安定的に維持することが難しくなる。多様な意味に開かれたやりとりと統一的な意味に閉じたやりとりがともに生起することで（阪口, 2022），ネット右派という、様々な立場を内包しつつ集団としての一体感を

持った集合体が維持されていると考えられる。

もちろん、本稿の分析対象はYouTubeに限定されており、他のSNSでも同様のメカニズムが生じているとは限らない。各プラットフォーム特有の構造が、そこでのやりとりの形式に影響を与えている可能性があるからだ。YouTubeはスレッド形式でコメントが並ぶ、すなわち利用者が「電子的な場」を共有しているという点で、共同性が形成されやすい情報環境と言える（北村・佐々木・河井, 2016）。言い換えると、集団の統合を志向する収束的な意見交換が生じやすい構造を有している。それに対して、例えばXは、利用者ごとに全く異なる情報の流れを目にしているという点で、個人化された情報環境と言える。このように共同性が形成されにくくと考えられるプラットフォームでも、収束的な意見交換は生じているのか、もし生じるとしたら、それはいかにしてか。こうした情報環境とやりとりの形式との関係については、今後解明すべき課題といえる。

6 おわりに

本稿では、ネット右派の主要な仮想敵の一つである「リベラル／サヨク」に着目し、現在の「リベラル／サヨク」批判が思想や理念よりも他者とのやりとりに動機づけられているという整理のもと、そのコミュニケーションの様相を明らかにすることを試みた。また、その分析結果をもとに、ネット右派の持続的な集団形成のメカニズムについて考察を加えた。

分析の結果、「リベラル／サヨク」に関しては、【カテゴリの調整】、【闘争の生成】、【批判の転覆】という三つの異なる方向性のコミュニケーションが発生していることがわかった。また、そこで生じる意見交換には、拡散的なものと収束的なものがあり、双方がともに生起することで、ネット右派の持続的な集団形成が可能になっていることが示唆された。本稿は、ネット右派という集合体の

性質を改めて問い合わせ直し、そのミクロな成立機制の一端を解明したという点で、意義のある研究と言える。また、ネット右派のコミュニケーションそれ自体のあり様に着目した研究の第一歩として位置づけることができ、今後の研究の土台としても一定の貢献を果たしうるだろう。

最後に本稿の限界と今後の展望について述べる。

第一に、考察でも述べたように、本稿の分析はYouTubeを対象におこなったものであり、本稿の知見がネット右派全体に適用できるわけではない。これから同様の研究アプローチを他のプラットフォームにも応用することで、知見を蓄積していく必要があるだろう。

第二に、本稿では「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションを分析対象としたが、他にも在日コリアンなど、右派にとっての仮想敵はいくつか存在する。今後は、様々な仮想敵との比較を通じて、ネット右派全体に共通するやりとりの形式と、アジェンダに固有の形式を明らかにしていくことが求められる。

第三に、本稿では比較的ミクロな次元にのみ着目してコミュニケーションの分析を行ってきたが、そうしたミクロなコミュニケーションとマクロな政治・社会状況との関係についても検討する必要があるだろう。「リベラル／サヨク」に関するコミュニケーションは真空で生じているわけではなく、より大きな社会的文脈の制約のもとで生じているため、政治・社会状況が変われば人々のコミュニケーションのあり方も変化する可能性がある。今後は、現実の政治・社会状況も視野に入れてオンラインのやりとりを見ていく必要がある。

注

(1) 既述の政治領域における構造変動だけでなく、メディア環境の変容や政治領域とサブカルチャー領域の相互作用なども、反「リベラル／サヨク」的な言説の成立に深く関わっている（伊藤、2019）。

- (2) このように、思想を志向するのではなく、接続すること自体を志向する「リベラル／サヨク」批判が広がった背景としては、1990年代末以降、特に若年層の間で特定の思想にコミットすること自体を拒絶するような態度が広がっていたこと（北田、2005；小熊・上野、2003）や、インターネット上で社会関係の形成それ自体を楽しむ自己充足的な関係のあり方が広がっていたこと（浅野、1999；2008；北田、2005）などが関係していると考えられる。
- (3) 親コメントとはコメント欄に書き込まれているコメントのことを、子コメントとは親コメントに対して付けられたリプライのことを指す。
- (4) 本稿では佐藤（2008）のオープンコーディング手法を参考にしている。高田（2016）も参照。
- (5) 基本的には1本の動画のコメント欄で一つの話題を焦点としたやりとりが生じていたが、中には1本の動画のコメント欄でいくつかの話題に関するやりとりが並行して生じているケースもあった。例えば、ゲストとして登場する研究者が「大学の左傾化」を厳しく批判する動画W11では、1)「リベラル／サヨク」にカテゴライズされる人々にはどういう特徴があるか、2)「リベラル／サヨク」による大学支配の実態はどうなっているかという、二つの話題を焦点としたやりとりが同時に生じていた。したがって分析の際には、1本の動画のコメント欄に投稿されているコメントを自動的にひとまとめのやりとりとみなすのではなく、一つひとつのコメントの焦点が何なのかを解釈・分類しながら分析を行った。
- (6) 分析対象として抽出したコメントの中には、「門田さんを信頼しています。ファンであります。WILLさん、ありがとうございます」というございま

す。」(W7) や、〈岩田温先生の解説、率直で分かりやすくて、好きです。岩田先生の時はいつも動画見てしまいます。〉(W17) のように、動画投稿者に向けて挨拶をしたり感想を伝えようとしたりするコメントが一定数出現していた。このように動画投稿者に向けられたコメントは、「リベラル／サヨク」に関するやりとりとは性質が異なる書き込みであると判断し、オープンコーディングの対象から除外している。

参考文献

- 浅野智彦 (1999) 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界——若者たちの東京・神戸90's』[展開編] 恒星社厚生閣.
- (2008) 「若者のアイデンティティと友人関係」広田照幸編『若者文化をどう見るか？——日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー.
- Cohen, A. (1985) *The Symbolic Construction of Community*, Ellis Horwood Ltd, Hertfordshire.
- (吉瀬雄一訳)(2005). 『コミュニティは創られる』八千代出版)
- Durkheim, É. (1912) *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, Félix Alcan, Paris. (山崎亮訳(2014). 『宗教生活の基本形態——オーストラリアにおけるトーテム体系（上）』筑摩書房)
- Hall, J. (2021) *Japan's Nationalist Right in the Internet Age: Online Media and Grassroots Conservative Activism*, Routledge, New York.
- 早川公・井出里咲子 (2009) 「2ちゃんねるのことばとコミュニティ感覚——カキコミの作法とそれが創る一体感をめぐって」三宅和子・佐竹秀雄・竹野谷みゆき編『メディアとことば4』ひつじ書房, 192-219.
- 樋口直人 (2014) 『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版
- 版会.
- 伊藤昌亮 (2011) 『フラッシュモブズ——儀礼と運動の交わるところ』NTT出版.
- (2019) 『ネット右派の歴史社会学』青弓社.
- 北田暁大 (2005) 『嗤う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版協会.
- 北村智・佐々木裕一・河井大介 (2016) 『ツイッターの心理学——情報環境と利用者行動』誠信書房.
- 倉橋耕平 (2018) 『歴史修正主義とサブカルチャー——90年代保守言説のメディア文化』青弓社.
- 百木漠 (2021) 「「左翼的なもの」への憎悪——ヘイトスピーチを增幅させるもの」清原悠編『レイシズムを考える』共和国, 214-231.
- 小熊英二・上野陽子 (2003) 『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶應義塾大学出版会.
- 阪口毅 (2022) 『流れゆく者たちのコミュニティ——新宿・大久保と「集合的な出来事」の都市モノグラフ』ナカニシヤ出版.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社.
- 鈴木彩加 (2019) 『女性たちの保守運動——右傾化する日本社会のジェンダー』人文書院.
- 鈴木謙介 (2005) 『カーニヴァル化する社会』講談社.
- 高田佳輔 (2016) 「オンラインゲームコミュニティにおける合理的問題解決能力・チームワーク能力——Final Fantasy XIVの参与観察を通じて」, 『社会情報学』5(1), pp.89-105.
- (2015) 『レイシズムを解剖する——在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房.
- 高史明 (2017) 「在日コリアンへのレイシズムとインターネット」塙田穂高編『徹底検証 日本の右傾化』筑摩書房, 34-53.
- 安田浩一 (2012) 『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』講談社.